

(財)京都市埋蔵文化財研究所設立と 京都市考古資料館の発足

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



旧西陣織物館の全景（現在の京都市考古資料館）

正確な撮影の年はわからないが、建築当初の写真であろう。「西陣」と大書した碑は、昭和3年秋に建てられたもので写っていない。現在の蘇鉄はいつ植えられたのか。木製の電柱も見える。市電の軌道敷が写っているが、市電は大正元年（1912）12月25日に烏丸今出川から今出川大宮まで敷設されている。

京都市では昭和51年11月、(財)京都市埋蔵文化財研究所を設立した。設立の目的について「設立趣意書」に基づき概観してみよう。

京都は千年の都、歴史の町であり、延暦13年（794）平安京遷都以来の伝統に始まる地上の文化財とそれを支える底辺には、遺跡などの埋蔵文化財が広大な範囲にわたって存在している。遺跡は、平

安京跡に限らず、市街地の周辺部にも集落跡・古墳群・寺院跡・窯跡などが多数存在している。

一方、京都市の都市機能を維持し、市民生活を向上させるための都市開発や再開発が急激にすすまれ、開発行為が遺跡地のうえに及ぶことがさけられない実情である。このため、地下の埋蔵文化財が破壊・き損する結果をまねいて

いる。したがって遺跡保護のための緊急発掘調査の必要性が生じている。

幸い、昭和50年10月1日に「文化財保護法」が一部改正され、埋蔵文化財保護のための制度の整備が図られた。京都市も、これに対応して国民的財産である文化遺産を後世に伝えてゆくため、市民と一体となってこのことに当たる必

要を痛感した。

市では、学術研究団体の指導・協力のもとに、市内の埋蔵文化財の調査を行ない、その成果の公開・活用を図ること、遺跡の保護と研究を通じて市民の埋蔵文化財に対する保護思想を啓発することを目的として（財）京都市埋蔵文化財研究所を設立したのである。

この研究所の調査研究活動の成果などについては、別に項目を設け論じることが必要であるが、特に発掘調査の成果を市民の埋蔵文化財に対する保護思想の啓発と関連させることが重要である。

そこで京都市では、（財）西陣織物館が、昭和51年4月移転したのにもない、この跡地1669㎡を買い入れ、建物は寄付を受けた。そして、かねての懸案であった埋蔵文化財に関する市民の理解と認識を深め、今後の市民文化の向上に資するため、発掘調査で出土した資料を体系的に広く市民に公開展示することを目的に「京都市考古資料館」として昭和54年11月28日に開館した。このことによって、発掘・調査研究・展示・収蔵を一つに統合した埋蔵文化財の殿堂がここに完成したのである。

開館に先立って、昭和53・54の両年度にわたり、耐震についての委託調査を実施し、その報告に基づき耐震・補強工事を行ない、つづいて建物の増改築工事を実施したのである。建物の規模・構造については、本館はレンガ造り3階建のべ996㎡、別館は鉄筋コンクリート3階建のべ1228㎡、収蔵庫は鉄筋コンクリート2階建の



開館ポスター

べ456㎡である。（資料館は、本館の1・2階を使用し、建築面積350.52㎡、のべ床面積673.19㎡である。）

考古資料館の建物（旧西陣織物館）は、昭和59年6月に京都市の登録文化財となった。この建物は、大正4年（1915）西陣織を陳列することを目的に、本野精吾の設計、清水組の施工により建設されたものである。設計者本野精吾は、寺内内閣の外相本野一郎の息子として明治15年（1882）誕生。東京大学建築学科を明治39年（1906）に卒業し京都市立高等工芸学校教授に就任、新日本建築を唱導した人物である。

建物自体は、昭和54年に、レンガ造り外壁の内側にコンクリートで構造補強が行なわれたが、意匠的には、簡潔な外形、単純な壁面意匠、精巧かつ抽象化された細部意匠など、従来の建築様式には見られない簡素な手法が用いられており、近代主義建築の先駆的作品として建築史上貴重なものである。更に床版（スラブ）に鉄筋コンクリートを用いた建築としても早い例に属するといわれている。構造補強工事によって、内部は3階会議室（旧貴賓室）を除いて大きく改造されているが、外観及び会議室の内装は当初の姿をよく残している。